

理工学部創設50周年

記念行事が行なわれる

十月二十七日、理工学部創設五十周年記念行事として記念式典、記念講演および記念祝賀会が行われた。

記念式典では初めに高祖敏明理事長が、理工学部の発展に尽力した教職員、学生、卒業生に感謝の言葉を述べるとともに「これからも時代のチャレンジに果敢に取り組み、世界と人類家族に貢献していくことを期待したい」と挨拶した。



十号館講堂での記念式典

感謝状の贈呈

野依良治氏の記念講演

次に滝澤正学長は、理工学部の創設によって、上智大学が真の総合大学として発展していく基盤が形成されたことを紹介し「理工学部が名実ともに文理融合教育の実現を一体的に担っていくことが本学の発展にとって大きな目標だ」と話した。そして、早下隆士理工学部長がスライドを使って理工学部の五十年間にわたる歴史と現在に至る取り組みを紹介。「五十年前の理念を受け継ぎつ

つ上智大学にしかできない新しい理工学部の創出を目指す」と語った。続いて理工学部創設にあたりドイツ・ケルン大司教区から多大な援助があったことから、ヨアヒム・マイスナー枢機卿に対し感謝状の贈呈が行われた。マイスナー枢機卿の代理としてフランツ・ヨゼフ・モール上智学院元財務担当理事に感謝状が渡された。枢機卿から

の祝辞として「理工学部と上智大学全体に神の祝福とさらなる成功をお祈りいたします」との祝辞が読み上げられた。その後、眞崎修後援会会長と和泉法夫ソフィア会会長の祝辞があり、式典は終了した。

続いて、独立行政法人理化学研究所理事長で二〇〇一年にノーベル化学賞を受賞した野依良治氏による「新時代の科学、技術を担う若者へ」と題した記念講演が、早下理工学部長の司会進行のもと行われた。

野依氏は自身の終戦後の困難な体験や、ノーベル賞を受賞した湯川秀樹博士に憧れた思い出を紹介しながら「化学を学ぶ、科学技術者として産業界

で製品を作り、世の中を良くしようと子ども心に考えた」と科学者を志したきっかけを語った。さらに、「これからの指導者は自らの文化に誇りを持ちながら、世界を俯瞰し、多様な価値観を持つ多国籍集団を束ねる能力を備えることが必要。若者達はそのための準備を怠ってはならない」と学生達を激励した。そして「これからの科学技術は、世界の人人々の基本的な生存権の保全に貢献しなくてはならぬ、その担い手は学生諸君であり、若い研究者だ」と講演を締めくくった。

その後、記念祝賀会がホテルニューオータニで行われた。

理工学部英語コース開設

日本人学生の英語力強化の取り組みも

文部科学省国際化拠点整備事業(グローバル30)の構想に基づき、二〇一二年秋学期、英語で全ての授業および研究指導、論文執筆を行う新たなコースが理工学部設置され、第一期生となる五人の学生を迎え入れた。

新設されたのは、物質生命理工学部の「グリーンサイエンスコース」と、アリンクコースでは、物理学、機械工学、電気・電子工学等を基盤とする環境工学分野の研究を行うプログラム構成となっている。なお、二〇一三年度秋学期には、大学院での英語コースの開設も予定されている。

また、理工学部では、日本人学生の英語力強化にも力を入れている。米国サンタクララ大学および同ノースカロライナ大学シャーロット校と提携した「理工系学生のための英語研修プログラム」や、外国人在学生をチューターに起用し、週一回研究室で英会話や英語のプレゼンテーションの練習を行うティーチングアシスタント制度を設けるなど、国際的に活躍できる科学者と技術者の育成に取り組んでいる。

ソフィアの視点

上智大学は、これまで日本の大学に先駆けてヨーロッパやアメリカの多くの大学との交流や学生の交換留学等を進めてきた。しかしながら昨今の

アジアの発展はめざましく、新たにアジア圏を中心とした国際化戦略が求められている。筆者も理工学部英語コース開設に向けて、二〇一〇年から

協力を得た新たな研究交流の拠点作りを進めている。これからの大学と

の学士院や高等教育機関で活躍しており、これは学部創設五十周年を迎えた。また女性研究者の留る狙いがある。

野依氏は自身の終戦後の困難な体験や、ノーベル賞を受賞した湯川秀樹博士に憧れた思い出を紹介しながら「化学を学ぶ、科学技術者として産業界

で製品を作り、世の中を良くしようと子ども心に考えた」と科学者を志したきっかけを語った。さらに、「これからの指導者は自らの文化に誇りを持ちながら、世界を俯瞰し、多様な価値観を持つ多国籍集団を束ねる能力を備えることが必要。若者達はそのための準備を怠ってはならない」と学生達を激励した。そして「これからの科学技術は、世界の人人々の基本的な生存権の保全に貢献しなくてはならぬ、その担い手は学生諸君であり、若い研究者だ」と講演を締めくくった。

その後、記念祝賀会がホテルニューオータニで行われた。

理工学部が目指すグローバル人材育成

理工学部長・研究科委員長 早下隆士



理工学部では一九七七年に「科学技術国際交流委員会(STEIC)」を設置し、これらの大学強化が必要がある。また中国の哈爾濱(ハルビン)工業大学、清華大と古くから交流を続けてきた。STEICを使って理工学部で学んだ留学生の日本語のみのカリキュラムが大きな障壁であっ

た。そこで理工学部では、修プログラムを開始しを備えた人材を育成す

の祝辞として「理工学部と上智大学全体に神の祝福とさらなる成功をお祈りいたします」との祝辞が読み上げられた。その後、眞崎修後援会会長と和泉法夫ソフィア会会長の祝辞があり、式典は終了した。

続いて、独立行政法人理化学研究所理事長で二〇〇一年にノーベル化学賞を受賞した野依良治氏による「新時代の科学、技術を担う若者へ」と題した記念講演が、早下理工学部長の司会進行のもと行われた。

野依氏は自身の終戦後の困難な体験や、ノーベル賞を受賞した湯川秀樹博士に憧れた思い出を紹介しながら「化学を学ぶ、科学技術者として産業界

で製品を作り、世の中を良くしようと子ども心に考えた」と科学者を志したきっかけを語った。さらに、「これからの指導者は自らの文化に誇りを持ちながら、世界を俯瞰し、多様な価値観を持つ多国籍集団を束ねる能力を備えることが必要。若者達はそのための準備を怠ってはならない」と学生達を激励した。そして「これからの科学技術は、世界の人人々の基本的な生存権の保全に貢献しなくてはならぬ、その担い手は学生諸君であり、若い研究者だ」と講演を締めくくった。

その後、記念祝賀会がホテルニューオータニで行われた。

野依氏は自身の終戦後の困難な体験や、ノーベル賞を受賞した湯川秀樹博士に憧れた思い出を紹介しながら「化学を学ぶ、科学技術者として産業界

秋の叙勲



十一月三日に秋の叙勲受章者が発表され、石澤智大(前上智大学長)が瑞宝重光章を受章した。

石澤教授はソフィア・ミッションとしてカンボジアにおける研究者や石工などの人材育成に尽力。アンコール遺跡クデイ寺院跡から仏像二百八十体を発掘し、アンコール王朝衰退に関する従来

の授業および研究指導、論文執筆を行う新たなコースが理工学部設置され、第一期生となる五人の学生を迎え入れた。

新設されたのは、物質生命理工学部の「グリーンサイエンスコース」と、アリンクコースでは、物理学、機械工学、電気・電子工学等を基盤とする環境工学分野の研究を行うプログラム構成となっている。なお、二〇一三年度秋学期には、大学院での英語コースの開設も予定されている。

野依氏は自身の終戦後の困難な体験や、ノーベル賞を受賞した湯川秀樹博士に憧れた思い出を紹介しながら「化学を学ぶ、科学技術者として産業界

で製品を作り、世の中を良くしようと子ども心に考えた」と科学者を志したきっかけを語った。さらに、「これからの指導者は自らの文化に誇りを持ちながら、世界を俯瞰し、多様な価値観を持つ多国籍集団を束ねる能力を備えることが必要。若者達はそのための準備を怠ってはならない」と学生達を激励した。そして「これからの科学技術は、世界の人人々の基本的な生存権の保全に貢献しなくてはならぬ、その担い手は学生諸君であり、若い研究者だ」と講演を締めくくった。

その後、記念祝賀会がホテルニューオータニで行われた。

野依氏は自身の終戦後の困難な体験や、ノーベル賞を受賞した湯川秀樹博士に憧れた思い出を紹介しながら「化学を学ぶ、科学技術者として産業界

手の祝福を受ける学生

将来への決意を新たに

石澤教授はソフィア・ミッションとしてカンボ

の学説を覆すなど、回国